

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)
 大学院学生研究
 2023年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	現代心理学研究科	映像身体学専攻
研究代表者 (2024年3月現在のものを記入)	在籍課程・学年		氏名
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 1年		菅藤 絢乃
指導教員	所属部局・職名		氏名
	現代心理学部・准教授		大山 載吉
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題	独我論的〈わかりあえなさ〉を融解させる連続テレビドラマの〈連続性〉をめぐって		
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2024年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名
	現代心理学研究科映像身体学専攻博士課程後期課程1年		菅藤 絢乃
研究期間	2023 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 197,399円 / (採択金額) 200,000円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の背景には、「連続テレビドラマという表現形式が持つ固有の〈連続性〉とは何か、また、その固有性は人間が根源的に抱える〈わかりあえなさ〉を融解させる〈生〉の運動そのものを描く上でいかなる効果を発揮し得るのか」という問いがある。これについて、本研究では「①サンドラ・ロジェ(Sandra Laugier(1961-))の連続テレビドラマ論精読」および映像身体学の骨子となるアンリ・ベルクソンやジル・ドゥルーズの〈持続〉や〈記憶〉の理論などを用いた「②現代の連続テレビドラマ作品の分析」の二つの方法によりアプローチした。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[映像身体学] [連続テレビドラマ] [気配]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

① サンドラ・ロジェの連続テレビドラマ論精読

著書『*TV-Philosophy in Action*』(2023)の中で、サンドラ・ロジェは「連続テレビドラマ」という表現形式には「a striking discrepancy(著しい矛盾)」(ロジェ 2023: 2、筆者邦訳)があると述べる。ロジェによれば、連続テレビドラマは現在多くの人々に好まれているにも関わらず、「~the lack of real interest in or even acknowledgement of them as works of thought(=思考作品としての連続テレビドラマに対して真の関心が欠如している、あるいは、そもそもそれらを思考作品として捉える認識すらない)」(ロジェ 2023: 2、筆者邦訳)現状がある。日本においても連続テレビドラマの放送終了後には SNS でハッシュタグ付きの感想ツイートが数多く見られ、市井の人々によって口々に語られている一方で、学問領域において扱われることは未だ少ない。

以下の通り、ロジェは、連続テレビドラマをひとつの芸術の形式として土俵に上げることを目論む。

My aim here in *TV-Philosophy in Action* is to elucidate or clarify series' particular power, and their thought—not in the sense of that which is thought about them, but rather the thought that they produce about the world in which we live. This is something that has gradually come to be recognized in cinema, which is now analysed as 'thought' in its own right, and not merely as an object of thought.

『*TV-Philosophy in Action*』における私の狙いは、連続テレビドラマ特有の力とその思想を解明し、明らかにすることである。それは、連続テレビドラマについて考えられていることという意味ではなく、むしろ、私たちが住んでいる世界について連続テレビドラマが生み出す思考という意味で、である。この意味は、映画において徐々に認識されるようになり、今や映画は、単なる思考の対象としてではなく、それ自体が「思考」として分析されるようになってきた(ロジェ 2023: 2、筆者邦訳)

「連続テレビドラマ特有の力とその思想を解明」しようとすることは即ち「連続テレビドラマの内容を哲学によって読み解くこと」とははっきり区別されるものであろうし、「哲学の諸概念を連続テレビドラマによって解説する」こととも異なるものであろう。それはロジェが「連続テレビドラマが生み出す思考」という言葉を使っていることから読み取れる。ロジェは「そもそも連続テレビドラマという形式そのものが思考である」ということを前提として、連続テレビドラマは私たちに思考/哲学させるのだと主張する。連続テレビドラマは哲学の材料なのではなく、哲学と同じ様に私たちに「哲学する」ように働きかけるのである。

ロジェは、連続テレビドラマの固有性について「model of ~contact and affection(=繰り返しの接触と愛情のモデル)」(ロジェ 2023: 8、筆者邦訳)という言葉で端的に述べている。連続テレビドラマは毎週同じ曜日・時間に作品が放送されるのが通常であるが、視聴者はそのたびに登場人物たちに接触し、やがてはそのことが日常となつてゆく。放送と放送の間にある1週間という時間、つまりは直接作品を観ていない時間さえも、その作品の一部として視聴者の〈生〉と並走し、溶け込むのである。

以上のように、サンドラ・ロジェの唱える「連続テレビドラマという表現形式そのものが私たち人間に哲学させるのである」という態度を前提として連続テレビドラマを哲学の従属物として取り扱わないという姿勢が存在するであろうという発見は、本研究の大きな成果のひとつである。次に本研究のもう一つの柱となる「②現代の連続テレビドラマ作品の分析」について概要を記すが、以下の分析は「①サンドラ・ロジェの連続テレビドラマ論精読」によって明らかにされた成果に下支えされて行われたものである。

研究成果の概要 (つづき)

② 現代の連続テレビドラマ作品の分析

NHK 連続テレビ小説(以下「朝ドラ」)第 104 作『おかえりモネ』(2021)を取り上げ、「〈気配〉と共に暮らす—『おかえりモネ』が描いた「宇田川さん」と「百音」の交流」とのタイトルで論文を執筆した。

主人公の永浦百音(演/清原果耶)は、岡室によって「わかりにくいヒロインである。少なくとも従来の元気で明るい優等生的なヒロインとは一線を画す。考え込むシーンも多く、元気はつらつというよりは、むしろ悩み多きヒロインだったと言えるだろう」(岡室 2021)と評されるように、これまでの朝ドラとは異なるヒロインとして描かれていた。

本論文では、百音の苦しみを生み出す構造を「独我論的〈わかりあえなさ〉」と名づけ、百音について独我論的〈わかりあえなさ〉によって隔たれ「他者といかに生きるか」について思い悩み続けるヒロインとして捉えた。

『おかえりモネ』において、百音は「成長」するヒロインとしては描かれていない。百音は、苦しみを抱えて考え込んだり迷ったりしている中で人や出来事と出会い、さまざまなことを経験しつつも答えは出さず(出さず)、引き続き時間をかけて考え込む只中にいて、そしていつの間にか、あるいは気付いた時には以前とは異なる自分になっており、さらにその後も何者かになり続ける(=「生成変化」し続ける)ヒロインとして描かれている。百音の〈生〉がいつの間にか変化していく様は、まさにロジェが指摘するように、「15 分×週 5 日×約半年」という固有の放送形式によって百音の〈生〉と視聴者の〈生〉が日常の中で繰り返し接触し続けたことによって感じられるのである。

このような百音の〈生〉の特異さについては、物語には登場するものの画面上には一切姿を見せないキャラクター「宇田川さん」(演/非公表)との交流のあり方にも見られる。

ふたりは互いの姿を一切見ることなく、時折漏れ聞こえてくる「百音/宇田川が発したであろう生活音」と共に生きる。ふたりの関係で重要な点は、互いの姿や外見に実際に接することがなく、リアルな身体の実感を感じることがなかったということ、つまりは「身体の希薄な者同士」であったことにある。百音の苦しみの根源である「独我論的〈わかりあえなさ〉」とは、人間がその異なる身体によってそれぞれに引き出した〈世界〉を生きる中で互いの〈世界〉が摩擦を起こすことから生まれる断絶であるが、宇田川と百音は〈世界〉の源である互いの身体を伴って交流することはなく、それによってそれぞれの〈世界〉同士のズレや隔絶を思い知る機会を持たない。そのような状況下であれば、「私にとってのあなた」や「あなたにとっての私」を感じる度合いは低くなるであろう。宇田川の音は百音にとって「宇田川さんが発したであろう音」であり、宇田川にとっても百音の音は「百音が発したであろう音」である。主体との帰着度合いが薄く、より〈音そのもの〉に近いところで、ふたりは互いの音を聞き、共に生きる。百音と宇田川は人稱を持たない〈音そのもの〉から「宇田川さん/永浦さんが発したであろう音」へと個体化した音を介して交流し、独我論的〈わかりあえなさ〉を融解させ、〈わかちあい〉へと向かったのである。

以上のような結論でもって、本論文は「朝ドラ」の中では特異な百音の〈生〉のあり方を示した。様式 3 に記入したように、本論文は『映像学』112 号に投稿中である。

なお、本論文の執筆に際し、筆者は〈音そのもの〉の領域における〈わかちあい〉に関心を寄せ、『愛していると言ってくれ』(1995)、『オレンジデイズ』(2004)、『ファイトソング』(2022)、『silent』(2022)、『星降る夜に』(2023)といった、いずれも聴覚に障害を抱える人物が主要人物として登場する作品群のシナリオや映像資料の分析を行った。

引用文献

岡室美奈子、2021 年 10 月 31 日、「『おかえりモネ』、タイトルの「おかえり」に込められた「深い意味」、マネー現代、2024 年 3 月 21 日、<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/88796?imp=0>。

ロジェ、サンドラ、2023、『TV-Philosophy: How TV Series Change Our Thinking』、ダニエラ・ギンズバーグ英訳、University of Exeter Press。

※この(様式 2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください (紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)

④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

① 菅藤絢乃、「〈気配〉と共に暮らす—『おかえりモネ』が描いた「宇田川さん」と「百音」の交流」、『映像学』、112号 (審査中)。